

社会科

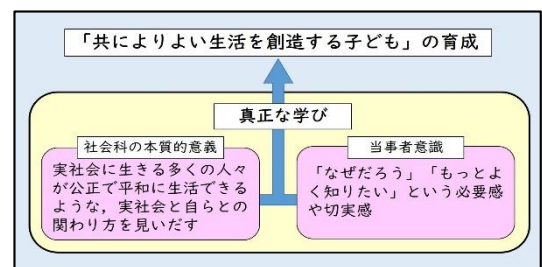
社会科部 井出 悠介 中野 智貴 樋口 晃
研究協力者 宮崎 沙織

I 社会科における「真正な学び」について

社会的事象の仕組みや人々の営み，社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだす学び

本校では、「共にによりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共にによりよい生活を創造する子ども」を育成するためには，社会科を学ぶ本質的な意義である「社会生活における人々の営みや，その仕組みの価値を認識し，それらを基に実社会に生きる多くの人々が公正で平和に生活できるような，実社会と自らとの関わり方を見いだす」ことが欠かせない。なぜなら，社会科の学習において，実社会と自らとの関わり方を見いだすために，実社会における課題を把握し，その解決に向けて追究することや，実社会に対して自らが実現可能な働きかけを選択・判断することにより，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者としての公民的資質を育むことができるからである。そして，このような社会科の学びを繰り返すことは，共にによりよい生活を創造していくことにつながる。

本校社会科部では，この本質的な意義を基に，社会科における真正な学びを「**社会的事象の仕組みや人々の営み，社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだす学び**」とした。社会科の問題解決的な学習において，子どもたちは，様々な社会的事象と出会い，学習問題をつかむ。そして，その学習問題への予想をもち，学習問題の解決に向けて一単位時間ごとに社会的事象の特色や相互の関連，意味を見いだすために追究し，具体的知識を得ていく。その中で，社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだす場面が生まれ，真正な学びの実現に向かっていく。単元の終末には，それらを基に，概念的知識を見いだしたり，実社会と自らとの関わり方を選択・判断したりしていく。このような学びをとおして，真正な学びが実現され，社会科を学ぶ本質的意義に迫ることができると考えた。また，このような問題解決的な学習の【つかむ】過程において，子どもたちが，実社会に対して抱いているイメージと実際のギャップを感じたり，普段の生活では気に留めていなかった社会的事象の仕組みや人々の営みに気付いたりしたときに，「なぜだろう」「もっとよく知りたい」という必要感や切実感を高めることができる。このような問題解決的な社会科の学習を踏まえ，社会科における真正な学び「**社会的事象の仕組みや人々の営み，社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだす学び**」を実現することをとおして，「共にによりよい生活を創造する子ども」を育成することとした。



＜図1 社会科における「共にによりよい生活を創造する子ども」のイメージ＞

2 研究の方向

昨年度，本校では問題解決的な学習において，真正な学びのデザインを行ってきた。実践の中での子どもたちの姿から，課題となる姿とその要因を以下のように捉えた。

課題となる姿	その姿の要因
社会的事象の事実を得た段階で，問題を解決したと思ってしまい，活動が停滞する姿	社会的事象の仕組みや人々の営み，社会的事象と自らの生活とのつながりまでを考えるとということに対する見通しや当事者意識が弱い

そこで、本年次は、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指し、真正な学びの中で、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体

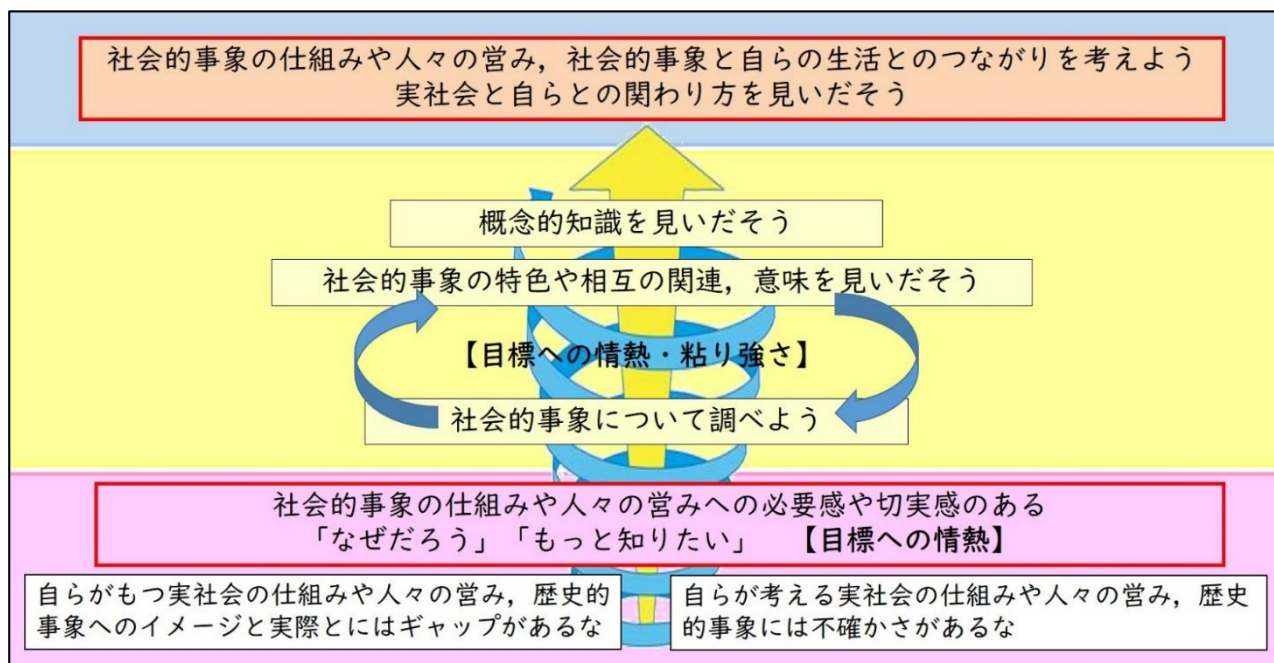
本校社会科部では、「**社会的事象の仕組みや人々の営み、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだす学び**」を実現することをとおして、社会科の本質的意義に迫ることができると考えた。そこで、社会科では「学習問題を解決する中で、社会的事象の仕組みや人々の営み、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだすこと」を目標とした。

この目標を達成するためには、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿がさらに現れるようにする必要がある。その「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿を以下のように捉えた。

目標への情熱	<u>社会的事象の仕組みや人々の営み、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだすことに向けて、社会的事象の特色や相互の関連、意味について自らの考えを表現している姿</u>
粘り強さ	追究する社会的事象の特色や相互の関連、意味について、自分なりに見いだしたり、見いだせずに停滞したりした際に以下のような姿が現れる 【姿の具体例】 - 途中で投げ出さずに資料を見直したり、複数の資料を比較したりする姿 - 他者が根拠とした聞き取りの結果や資料について質問し、自らもその情報を得ようとする姿 - 自らが見いだした事実や考えを他者に教えている姿 - 自らが見いだした事実や考えの妥当性を確かめようと他者に話しかける姿 - 他者の言葉に対して「でも」「なるほど」のような言葉を発したり、頷いたりする姿 など

(2) 学びのプロセス

社会科の問題解決的な学習の過程をとおして、以下のような学びのプロセスが生まれると考えた。



＜図2 社会科の問題解決的な学習の過程の中で生まれる学びのプロセス＞

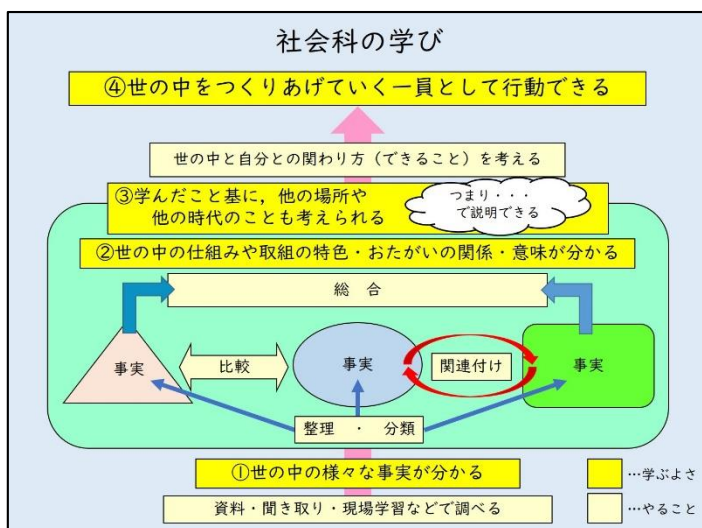
(3) 真正な学びのデザイン

社会的事象の特色や相互の関連、意味を見いだすことを繰り返し、それらと自らとの関係や、自らとの関わり方を見いだすことによって、「**社会的事象の仕組みや人々の営み、社会的事象と自らの生活**

とのつながりを見いだす学び」を実現する。そして、実社会と自らとを結び付け、社会科の本質に迫っていく。そのための、真正な学びのデザインを以下のように捉えた。

①社会科の本質に迫る学び

社会科の本質に迫る学びとして、社会科を学ぶことで身に付けられること、考えられること、生きる上で活用できることなど、社会科を学ぶことのよさを子どもたちと共有する機会を学期始めに設ける。なお、単元の導入においても、社会科を学ぶことのよさを子どもたちに問いかけ、そのよさを想起できるようにする。(図3)



＜図3 社会科を学ぶよさの図＞

②当事者意識のある学び

社会科における真正な学びの実現に向け

て【つかむ】過程において「目標への情熱」を高められるようなデザイン,【追究する】過程において「目標への情熱」を継続し,「粘り強さ」を発揮するようなデザインとなるように工夫する。

過程	学びのプロセス	学びのデザイン
つかむ	・ 自らが感じた社会的事象に対するギャップや不確かさに、「なぜだろう」「もっと知りたい」という必要感や切実感をもつ。 ※解決したいという当事者意識の高まりから、「目標への情熱」をもつ。	・ 位置や空間的な広がり, 時期や時間の経過, 事象相互の関係がうかがえる資料を用意し, 子どもたちが, 社会科の見方・考え方を働かせながら, 資料を疑問や予想の根拠とできるようにする。
追究する	・ 単元の初めにもった意識を想起し, 社会的事象の事実や具体的知識を見いだそうとする。 ・ 社会的事象と人々のつながりを見いだそうとする意識をもったり, 高めたりする。 ※「目標への情熱」を想起し, 「粘り強さ」を発揮して問題を解決していく。	・ 学習問題を立てた際の資料や子どもたちの意識を教室内に掲示する。 ・ つながりを見いだすための振り返りをする。 ・ 一単位時間ごとの導入において, 掲示物, 自らの振り返りやその自己評価を活用する。

③真正な学びのデザインの工夫の具体

単元の初めにもった意識の想起による当事者意識の喚起

単元の初めに, 自らが感じた社会的事象に対するギャップや不確かなことからもった「なぜだろう」「もっとよく知りたい」という必要感や切実感を想起して追究できるように, 学習問題を立てた際の資料や子どもたちの意識を教室内に掲示しておく。学習問題を立てる際には, 位置や空間的な広がり, 時期や時間の経過, 事象相互の関係がうかがえる資料の提示を行う。代表的な資料は以下のようなものである。

位置や空間的な広がり	地形図, 分布図, 勢力図
時期や時間の経過	年表, 過去と現在とを比較できる写真
事象相互の関係	人々の取組が見える写真, 人々の取組によって出た数値のグラフや表

学習問題を立てた際の資料や子どもたちの意識を教室に掲示すると共に, 一単位時間ごとの「めあ

て」を立てる際にも、掲示した資料や意識を見直すよう促し、子どもたちが単元の初めに社会的事象と出会った際の意識を想起し、当事者意識を高めて追究ができるようにするデザインを行う。

社会的事象の特色や相互の関連、意味、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだすための振り返り

一単位時間ごとに社会的事象の特色や相互の関連、意味を追究し、その振り返りを蓄積する。地域学習、地理的内容や公民的内容の学習では、「社会的事象の仕組みや人々の営みの特色が（相互の関連が、意味が、のように学習内容によって使い分ける）、自分たちの生活にどのような影響をもたらすのか」といった視点などを、歴史学習では「自分が、〇〇時代の△△（武士・百姓などの立場）だったら、その□□（歴史上の人物の業績）についてどんな思いをもつか」のように、自らをその時代に生きる人々に置き換える視点などを提示することが考えられる。振り返りシートには、学習計画の欄、本時の学びの中から社会的事象の特色や相互の関連、意味、社会的事象と自らの生活とのつながりについて見いだせたレベルを自己評価する欄を作る。子どもたちが、次時の「めあて」を立てる際に振り返りシートの記述や自己評価を見返すことで、「事実は分かったけど、つながりは、はっきりさせられなかったから、今日の内容も含めてつながりを考えたい」「ある程度、つながりを見いだせたから、もっと具体的にしたい」のように、子どもたち個々の思いによって、社会的事象の特色や相互の関連、意味を追究し、つながりを見いだすまでの学びの連続性を強くするデザインを行う。

4年 ごみのゆくえ

①社会科の見方・考え方を働かせた疑問や予想



前橋市の様子を撮影した写真や資料を用意しました。この様子について、何か知っていることや気付いたことはありますか。



主なごみの収集所	
燃える	4300
燃えない	3500
資源	3300か所
1日平均380t	
1日200台以上が	
清掃工場へ	
多いときは450台も	
1日最大900t	
1t=1000kg	

※ごみを処理する事業と人々の生活との関係が見える写真や表と自らの生活とを関連付けて疑問や予想をもつ

ごみの集積所やごみが散らかっている様子だね。当然、それぞれの地域の人が出したごみだね。
このごみを集めて、車で運んでくれている人もいるよね。

【人々の営みへの意識】



ごみを運んでくれることは知っているけど・・・。
ごみを入れるかごに、ルールが書いてある。違反するとごみは運んでもらえないのかな。あと、どこに運んで、どうやってごみを処理しているかは分からないな。

【仕組みへの意識】



それに、ごみが散らかっているところもある。普段は気にしていなかったけど実際にこんなところがあるなんて意外だよ。ごみを出す側の自分たちも、何かできることをしないと世の中が汚くなってしま・・・。

【自らの生活とのつながりへの意識】

学習問題

自分たちが出した大量のごみは、どのようにして処理されているのだろう

②学習問題を立てた際の資料や子どもたちの意識の掲示と振り返りの活用



前は燃えるごみを処理する工夫が見いだせましたね。どのような工夫があったのでしょうか。

この前の学習で、燃えるごみの処理は、においが外に出ない工夫をしてくれていたことが分かったよ。ぼくたちの生活に、直につながっていたな。



今日は何について追究していきますか。それは何のためでしょう。

この学習の初めに、いろいろなごみを出していることに改めて気付いたんだ。今日は、資源になるごみの処理はどんな工夫がされているかについて解決するぞ。

資源になるごみの処理も、ぼくたちの生活とつながっているのかな。それをやる意味も見付けたいな。



ごみ収集車でごみを運んでくれることは知っている
運んだあとは、どのように処理をしているのかな
いつもきれいにするためにどんなことをしているのかな

大量のごみで汚くなってしまうのは嫌だな
でも、自分たちもごみを出している
気を付けないと世の中を汚してしまうかも
自分たちにも何かできることがありそう

主なごみの収量例
燃える 4500
燃えない 3500
資源 3500
1日平均3500
1日2000以上が
資源工場へ
多いときは4500台も
1台あたり500kg

学習問題
自分たちが出した大量のごみはどのようにして処理されているのだろう。

は、振り返りの活用からの意識
は、初めの意識の想起からの意識

※初めにもった意識や前時の振り返りを見直し、学びの見通しをもち、当事者意識を喚起する

①・②によって、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮して追究することにつながる

4 授業実践 5年「自然災害を防ぐ」

(1) 単元における学びのデザイン

自然災害と国土の自然条件との関連や、自然災害から国民生活を守るための国や県などの対策を調べ、その意味を考えることは、実社会の一員として地域や自らの安全を守るために自らができる取組を考え、実際に行動する素地を育むことにつながる。その実現に向けて、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮し、自然災害の特色や自然災害に対する国や県などの対策を調べたり、自然災害と国土の自然条件、国や県などの対策と人々の生活とを関連付けたりすることで、自然災害と国土の自然条件や、自然災害に対する国や県などの対策と自らの生活とのつながりを見いだすことができると考え、次のように単元を構想し、学びのデザインを工夫した。

目標	我が国の国土と国民生活との関連について、自然災害は自然条件と関連して発生していることや、国民生活を守るために国や県などが様々な対策をしていることを理解する。
過程	時間 学習活動
つかむ	1 ○世界と日本で起きた主な自然災害の資料から、疑問点や調べたいことを話し合い、学習問題と学習計画を立てる。 学習問題 自然災害からわたしたちの生活をだれがどのように守っているのか <調べる観点> ・地震への対策 ・津波への対策 ・風水害への対策 ・火山の噴火、大雪への対策
追究する	1 ○地震への対策について調べ、国土の自然条件や人々の生活とのつながりを話し合う。 1 ○津波への対策について調べ、国土の自然条件や人々の生活とのつながりを話し合う。 1 ○風水害への対策について調べ、国土の自然条件や人々の生活とのつながりを話し合う。 1 ○火山の噴火・大雪への対策について調べ、国土の自然条件や人々の生活とのつながりを話し合う。
まとめる・生かす	1 ○学習問題の答えを出す。

本単元において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体は、次のとおりである。

「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体 ・「目標への情熱」 「目標」 自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを見いだすことに向けて、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活との関連について自らの考えを表現している姿 ・「粘り強さ」 追究する自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりについて、自分なりに見いだしたり、見いだせずに停滞したりした際に以下のような姿が現れる 【姿の具体例】 ・途中で投げ出さずに自然災害の特色や国や県などの対策の資料を見直したり、複数の資料を比較したりする姿 ・他者が根拠とした資料について質問し、自らもその情報を得ようとする姿 ・自らが見いだした自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを他者に教えている姿 ・自らが見いだした自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを確かめようと他者に話しかける姿 ・他者の言葉に対して「でも」「なるほど」のような言葉を発したり、頷いたりする姿 など

なお、本単元において、子どもが「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮できるように、学びのプロセスを想定し、学びのデザインを以下のように具体化して行った。

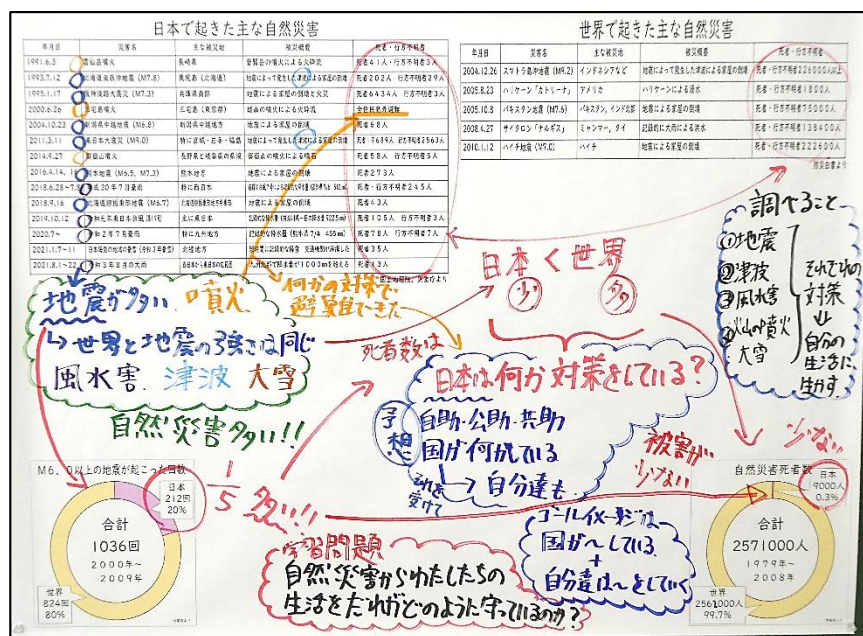
【学びのプロセスの具体】	【学びのデザインの工夫の具体】
○単元の初めにもった意識の想起による当事者意識の喚起 ・日本は世界に比べて自然災害が多いのに、被害が少ないのは、なぜだろう。自然災害の被害を減らすために誰がどのような対策をしているのか調べて、自然災害の対策と自分の生活とのつながりを見いだしたいな。 ・日本は太平洋側で津波による災害が多かったけど、被害が少ないのは、何か対策をしているはずだからだよ。それを明らかにしたいな。	・学習問題を立てる際に使った「日本と世界の主な自然災害」「自然災害死者数」から抱いた意識を掲示する ・一単位時間の「めあて」を立てる際に、単元の初めにもった意識を問いかけ、本時の学習で追究をする意欲を高める。
○社会的事象の特色や相互の関連、意味、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだすための振り返り ・日本は地震や津波が起こりやすい場所だから、国や県が様々な対策をして、わたしたちの生活を守ってくれているね。 ・前回の地震については、資料から事実を読み取るところまでしかできなかったから、今回は、自分の生活とのつながりまで見付けたいな。 ・地震や津波だけでなく、風水害でも国や県は何か対策をしているはずだよ。だって、群馬県は、津波よりも風水害の方が地形的に起こりやすいからさ。今日は、それを明らかにしたいな。	・自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの自然災害への対策と自らの生活とのつながりについて見いだせたいレベルを自己評価し、振り返りを行う。 ・一単位時間の「めあて」を立てる際に前時の振り返りを活用することで、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりをより意識できるようにする。

（２）学びの実際 ※Gは抽出児、Cはその他の子ども、Tは教師、 は「目標への情熱」、 は「粘り強さ」を発揮した子どもの姿

【本単元における、子どもたちや抽出児 G の学び】

①【つかむ】過程（第1時）

第1時、子どもたちは、生活経験や既有知識を基に、自然災害の被害の様子について話し合った。子どもたちは、提示された日本と世界で起きた主な自然災害（図4左上、右上）や、M6.0以上の地震の回数や自然災害死者数（図4左下、右下）の資料から読み取ったことを基に、疑問や調べたいことをもち、学習問題と学習計画を立てた。その際の子どもたちの様子は次のとおりである。



＜図4 学習問題と学習計画を立てた際の子どもたちの意識＞

G：(日本と世界の主な自然災害の資料を指しながら)日本は世界に比べて自然災害が多いね。

C：(自然災害死者数の資料を指しながら)でも、自然災害による死者数は世界に比べて少ないよ。(図5)

G：(驚いた顔をして)本当だ。どうして自然災害が多いのに、死者数が少ないの。日本は活火山や流れが急な川がたくさんあったり、台風の通り道になったりしているから、自然災害が起きやすいはずなのに。日本は何かしているのかな。

G：(しばらくして、思い出したかのように)4年生で自助・公助・共助をやったから、きっと何か対策をしているんだよ。

C：(頷きながら)確かに。誰かが何かしているから、僕たちは安心して生活できているんだね。

G：日本の自然災害に対して誰が、何をしているか調べれば被害が少ない理由が分かりそうだね。

C：自然災害の対策だけでなく、自然災害が起こる原因も調べれば、自分の生活とのつながりも考えていけそうだね。

G：(頷きながら)うん。自然災害が起こる原因やその対策と自分の生活とのつながりを考えていきたいね。

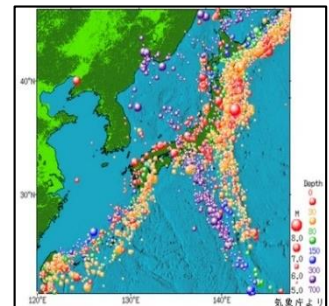


＜図5 自然災害死者数のグラフを見ながら自分の考えを伝える様子＞

このようにGは、生活経験や既有知識を踏まえ、自然災害について話し合うことをとおして、本単元において、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と人々の生活とのつながりを追究していくことへの見通しをもった。

②【追究する】過程(第2時～第5時)

第2時、子どもたちは、前時の「被害を減らすために誰が何をしているのか調べたい」という意識を基に、地震の特色や国や県などの対策を調べ、地震と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを話し合った。子どもたちは、過去の地震発生分布図(図6)と日本周辺のプレート地図(図7)から、太平洋側のプレートの境目で地震が多く発生していることや、地震が多い国だからこそ、多くの人が協力して対策していることを見いだした。そして、子どもたちは、「国や県は、過去のデータを基に多くの機関が協力をして地震に備えた対策をしているから、わたしたちの生活は守られている。」とまとめた。振り返りでGは、「地震は日本のどこでも起こるから、国や県が出す防災ブックを確認して、自分でも対策できるようにしていきたい。」と地震と国土の自然条件との関連や、国や県の対策と自らの生活とを関連付けて記述していた。また、Gは、「津波も過去に多く発生していたから、津波対策も調べたい。」と発言し、次時で解決したい問題への見通しをもった。



＜図6 1960年から2011年地震発生分布図＞



＜図7 日本周辺のプレート地図＞

第3時、子どもたちは、本時の「めあて」を立てる際に、単元の初めにもった意識や、前時の振り返りを見直し、津波の特色や国や県などの対策を調べ、津波と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを見いだそうとする意欲を喚起し、それらについて話し合った。その際の子どもたちの様子は以下のとおりである。

G：地震発生分布図(図6)と日本周辺のプレート地図(図7)、津波の歴史を見ると、地震が多い太平洋側で津波がよく起きているね。

C：(頷きながら)本当だ。地震が多いところで、津波がよく起こるということは、地震と津波の発生は関係しているね。

G：太平洋側で津波が多いということは、津波対策をたくさんしているとも言えそうだよ。

C：国の対策を調べてみると防潮堤や津波タワーを造っているよ。

G：地域でも避難訓練をしているよ。

C：これで太平洋側の人たちも安心して過ごせるね。

G：でも、本当に安心していいのかな。実際、東日本大震災のとき、津波で亡くなった人が多かったと初めてやったからさ。

このように G は、津波と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを見いだすために話し合っていた。しかし、国や県などの対策と自らの生活とのつながりまで見いだせずに、活動が止まってしまった。そこで、G は、再度、地震発生分布図（図 6）と日本周辺のプレート地図（図 7）、津波の歴史の資料を見直した後、「日本一の防潮堤（図 8）」をじっくりと読み始め、想定外の被害への対策を再考し始めた。その様子は以下のとおりである。

G：（地震発生分布図と日本周辺のプレート地図、津波の歴史の資料を見直した後、日本一の防潮堤（図 8）」をじっくりと読み、驚いた表情をしながら）日本一の防潮堤が壊されている。世界からも注目されていたのに。

C：地元の人達は、日本一の防潮堤があるから安心しきっていたみたいだね。

G：日本一と聞いたら絶対、安心だと思ってしまうよ。僕だって、そう言われたら安心しちゃうな。

C：やっぱり、国や県の対策に頼りすぎはいけないね。地震と同じで、自分でも何か対策をしないとね。

G：そうだね。国や県は、僕たちの生活を守るために対策しているけど、それを頼りにしすぎずに、一人一人が自分の命を自分で守れるようにしていかなければいけないね。

「日本一の防潮堤」無残 想定外の大津波、住民ぼうぜん
「日本一の防潮堤」「万里の長城」——。住民たちは、そう呼んで信頼を寄せていた。岩手県宮古市田老地区にあった全国最大規模の津波防潮堤。だが、東日本大震災の未曾有の大津波にはなすべもなく、多数の死者と行方不明者が出た。
～中略～
小林さんは「防潮堤は安心のよりどころだった。『防潮堤があるから』と逃げ遅れた人も多かったのではない。堤をもっと高くしないと、これでは暮らしていけない」。
～中略～
日本一の防潮堤として、海外からも研究者が視察に訪れるほどだった。しかし、今回の津波は二つの防潮堤をやすやすと乗り越えた。
～中略～
宮古市は津波防災都市を宣言している。地域振興課長の島居利夫さん（59）は「防潮堤は、これまで経験した大津波を想定して整備された。だが、今回は想定外だった。今後、どう津波対策を立てるのか。今のところ思いつかない」と肩を落とす。（吉村治彦）
「2011年3月20日朝日新聞デジタルより」

<図 8 日本一の防潮堤の記事>

このように G は、資料を見直したり、じっくり読んだりした。（図 9）そして、国や県だけでなく、自分自身で命を守ることの重要性を見だし、「国や県は、わたしたちの生活を守るために対策しているけど、それに頼りすぎず、一人一人が自分の命を自分で守れるようにしていかなければいけない。」とまとめた。この G の姿は、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮した姿であった。また、振り返りで G は、「群馬県には海がないから津波は起きないけど、家の近くに川があって氾濫する可能性もあるから、風水害では、国や県の対策を調べて、自分ができることを考えたい。」と記述し、次時で解決したい問題への見通しをもった。



<図 9 配付された資料を読む G>

第 4 時、子どもたちは、前時でもった見通しを基に、風水害の特色や国や県などの対策を調べ、津波と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを話し合った。子どもたちは、群馬県は山や川が多いため風水害が起こりやすいことや、国や県では、首都圏外郭放水路や砂防ダムを造って、被害を防いでいることを見いだした。また、地震や津波と同様に国や県などの対策に頼りすぎず、自らの身を守る行動の必要性を見だし、「国や県が風水害の対策をしているが、想定外もあるので、自分でも対策をしていく必要がある。」とまとめた。振り返りで G は、「群馬県は山や川が多いので、風水害が起こりやすいから、自分でもハザードマップを見て行動できるようにしたい。」と記述した。また、「群馬には浅間山があるから、火山の対策は、よく調べないといけない。大雪については、群馬は、雪があまり降らないところが多いから、何をしているのかよく分からないな。でも、想定外が起こるかもしれないから、詳しく調べない」と発言もし、次時で解決したい問題への見通しをもった。

第 5 時、子どもたちは、前時でもった見通しを基に、火山の噴火や大雪の特色や国や県などの対策を調べ、火山の噴火や大雪と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを話し合った。子どもたちは、国や県は、地域に合わせて警戒情報を出したり、事前対策を講じたりしていることを見いだした。また、今までの自然災害と同様に、国や県の対策に頼りすぎず、自らの身を守る行動の必要性も見だし、「国や県が噴火や大雪の対策をしてわたしたちの生活を守っているが、自然災害には想定外が起こることもあるので、自分でも対策する必要がある。」とまとめた。

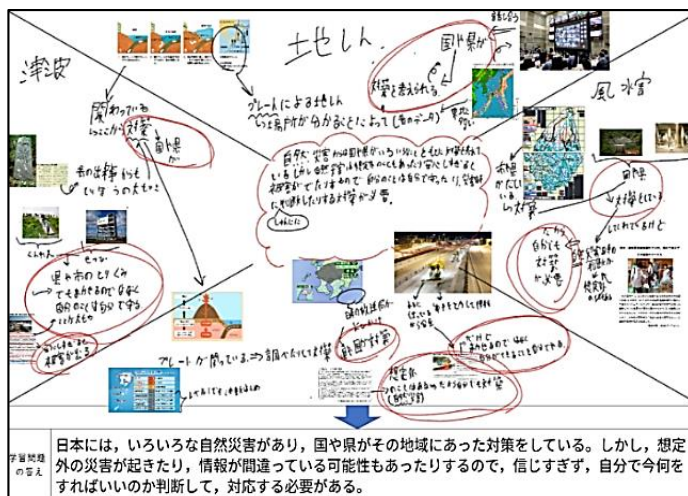
振り返りで G は、「群馬は、雪は少ないけれど、山は多いので家族でもしものことを考えて話をしたり、噴火が起きたらどうするか、家族と離れていたときはどこで会うか話しておいたりしたい。」と記述した。また、「どの自然災害でも、国や県の対策と自分ができる対策が共通点としてありそうだね。」と発言もした。

③【まとめる・生かす】過程（第6時）

第6時、子どもたちは、学習問題の答えを出すために、追究の過程で活用した学習シートや振り返りシートを見返した。そして、学習問題について G は、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とを関連付けて、「日本には、いろいろな自然災害があり、国や県がその地域にあった対策をしている。しかし、想定外の災害が起きたり、情報が間違っている可能性もあったりするので、信じすぎず、自分で今何をすればいいのか判断して、対応する必要がある。」とまとめた。（図10）振り返りで G は、「国や県がわたしたちの生活を守るために、その地域にあった対策をしてくれていることが分かった。また、国や県に頼りすぎないで、自分たちでも対策する必要があるので、自然災害に合わせて対策をしたい。」と記述した。

これまでの学習を通して、G は、単元の初めに抱いた「被害を減らすために誰が何をしているのか調べたい」という見通しや、一単位時間ごとに抱いた「自然災害の特色を調べたい」「自然災害に対する国や県などの対策と自らの生活とのつながりについて調べたい」という思い（図11）を基に、自然災害の特色や、国や県などの対策を調べ、それを記述したり伝えたりする姿が見られた。また、複数の調べたことや他者の意見を考察することで、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりについて考えたことを記述したり、伝えたりする姿も見られた。自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの自然災害対策と自らの生活とのつながりについて考える活動における G は、「国や県はわたしたちの生活を守るために、地域に合った対策をしてくれている」という社会的事実と、「国や県に頼りすぎないで、自分たちでも対策する必要があるので、自然災害に合わせて対策をしたい」という自らの生活とを関連付けて、社会と自らとの関わりを見いだすことができた。このことから、G は、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮しながら社会科を学ぶ本質的意義に迫ることができたと言える。

G 以外にも、単元を通して、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮した姿が見られた。その要因と



＜図10 Gが学習問題をまとめた学習シート＞

学習問題 自然災害からわたしたちの生活をだれがどのように守っているのか？		
学習計画	ふり振り返り	人々の生活とのつながりを見いだせたか
地震への対策	国や県が過去のデータに基づいて対策をしてくれていることが分かった。地震は日本でも起こるから、国や県が出す防災ブックを確認して、自分でも対策できるようにしていきたい。津波も多く発生しているから、津波に対しても国や県などが対策しているはずだから、次はそれ調べたい。	○・△
津波への対策	地震のときと同じように、国や県が昔のデータに基づいて、高台などを造って守ってくれていることが分かった。群馬県には海がないから津波は起きないけど、家の近くに川があって氾濫する可能性もあるから、風水害では、国や県の対策を調べて、自分ができることを考えたい。	○・△
風水害への対策	地震や津波のように、風水害も国や県が対策をしてくれていた。でも、自然災害には想定外もあるので、自分でも対策をすることが分かった。特に、群馬県は山や川が多いので、風水害が起きやすいから、自分でもハザードマップを見て行動できるようにしたい。火山や大雪の対策も調べて自分ができることを考えたい。	○・△
火山の噴火 大雪への対策	国や県が噴火や大雪の対策をしてくれていることが分かった。自然災害には想定外のこともあるので、自分でも対策が必要があることが分かった。群馬は雪は少ないけれど、山は多いので家族でもしものことを考えて話をしたり、噴火が起きたらどうするか、家族と離れていたときはどこで会うか話しておいたりしたい。	○・△
単元のふり振り返り		
国や県がわたしたちの生活を守るために、その地域にあった対策をしてくれていることが分かった。また、国や県に頼りすぎないで、自分たちでも対策する必要があるので、自然災害に合わせて対策をしたい。地震では、家具を固定したり、避難場所を確認したりしたい。風水害では、防災グッズを用意したり、ハザードマップを確認したりしたい。火山の噴火や大雪では、国や県が出す情報をしっかりと見ていきたい。		
※国や県などの自然災害への対策と自らの生活との関連を見いだした記述は、赤線で、上記を基に、自然災害と自らの生活とのつながりを見いだした記述を青線で加筆した。		

＜図11 Gが記述した振り返りシート＞

しては、単元の初めにもった意識の想起と、学習問題を解決するために追究をする意欲をもち直したことが有効であったと考えられる。子どもたちが、一単位時間の「めあて」を立てる際に、「自然災害が多いのに被害が少ないのはなぜか」という単元の初めにもった意識を想起することで、本時で追究する自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策と自らの生活とのつながりを調べるといふ意欲を高めることができたからである。また、社会的事象の特色や相互の関連、意味、社会的事象と自らの生活とのつながりを見いだすための振り返りも有効であったと考えられる。一単位時間の「めあて」を立てる際に、前時の振り返りで抱いた問題意識を活用することで、自然災害と国土の自然条件との関連や、国や県などの対策を追究し、それらと自らの生活とのつながりを見いだそうとする「目標への情熱」をより高めることができたからである。一方で、本研究のデザインの工夫では、一単位時間の追究が始まると、目の前の資料を読み取ることに傾倒する姿があり、「粘り強さ」の発揮が不十分な様子が見られた。その中でも、自然災害の特色や、国や県などの対策の資料を見直したり、比較したりして、「粘り強さ」を発揮した姿が見られたのは、日本一の防潮堤の資料（図 9）のような子どもたちがギャップを感じるような資料を追究が行き詰まった際に提示したことが有効であったと考えられる。

5 成果と課題

本校社会科における問題解決的な学習の中で「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿が現れるための学びのプロセスと学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

社会的事象と自らの生活とを関連付けて考えられている子どもの発話や記述が多くなった。この姿は、「目標への情熱」を、単元全体を通して継続して発揮できたことや、一単位時間ごとの学習の中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味を「粘り強さ」を発揮して追究できたからであると考えられる。この姿は、真正な学びに向かう社会科の問題解決的な学習の過程や、その過程を見直した導入や振り返りの工夫によって、問題解決に対して当事者意識をもつことができたからであると考えられる。

○課題

学習問題を立てた際の資料や子どもたちの意識を教室内に掲示するだけでは、見るだけにとどまってしまう、学習問題を解決していく見通しをもち直したり、調べようとする意欲を喚起したりするまでに至らないことがあった。これを解決し、子どもたちが、「問題を解決したい」「調べたい」「考えたい」という思いをより高められるように、一単位時間ごとの「めあて」を立てる際や追究が行き詰まった際にも、子どもたちが自らの生活経験とのギャップや自らの知識の不確かさを感じられる資料を提示することが効果的であると考えられる。これによって、追究への意欲をさらに喚起することとなり「目標への情熱」や「粘り強さ」をより発揮し、問題を解決しようとするができるようになる。

【参考文献】

- ・澤井陽介・北海道社会科教育連盟『「～のはずなのに、なぜ？」を教材化する社会科学習』、東洋館出版社、2022年。
- ・奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』、東洋館出版社、2021年。
- ・小倉勝登・廣嶋憲一郎・石井正広・新宿区立四谷小学校社会科研究会『小学校社会科の授業モデル&学習評価』、明治図書出版株式会社、2021年。